
Bitter Memories

かしわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B i t t e r M e m o r i e s

【Nコード】

N 9 2 9 6 I

【作者名】

かしわ

【あらすじ】

一人の女性の、ある日のひとコマ。

B i t t e r シリーズ？

（前書き）

まいど、ありがとうございます。かしわ、です。

突発短編、第二弾。

シリーズにする予定では、まったく無かったのですが、話の共通点で、似たタイトルにしました。

Bitter Tasteとは、まったく無関係ですので、ご注意を……

通り過ぎていく、地下鉄の風が、髪を舞あげた。最終電車を見送ってホームに残ったのは、あたし一人きりだった。

行き先なんて、無かった。

帰る場所なんて、無かった。

あたしは、一人きりで生まれて
一人きりで、消えていく。

涙は、流さない。

流すもんか、という気概をこめて、からっぽの線路を、睨みつけていた。

「大丈夫ですか？」

背後から、柔らかな声が掛った。自分に声をかける人がいるなど、思いもしなかった。

驚き、振り返った先にいたのは、少しくたびれた、制服を身に纏った、駅員さんだった。

「今の電車が終電ですけど……大丈夫ですか？」

「……はい……すみません。もう、改札閉まりますよね……」

「あ、いいえ……」

駅に残る客を誘導するために、声をかけたのかと思い、謝れば、彼は何故か、言葉を濁した。

どこか迷ったように、頬を搔く彼の仕草に、首をひねる。

「電車に乗れなかったんですか？」

「……そうです」

本当は、乗らなかったのだ。ただ、扉が閉まるのを、白線の内側で見つめていた。

だけど、初対面の駅員さんに、それを言う理由はなかった。だから、平然と、嘘をついた。

「……そう、ですか」

「そう、なんです……」

なんなのだろう、この人は？

駅に居座る酔っ払いを駆逐するのと同じく、自分も追い立てられるのだ、と思った。けれど、彼は、強いて追い立てる仕草を見せない。相手の行動に、疑問を感じつつ、いつまでも、ホームで二人向き合っている、意味がない。

最終電車を見送りながら、感じていた、心の荒びは、既に、綺麗に姿を潜めてしまった。

小さく、向き合う相手に、会釈し、立ち去ろうと背を向けた。

「あのっ！」

「……なにか？」

「……。……。のど、渴いてませんか？」

本当に、何をしているんだろう？

温かなコーヒーが入ったマグカップを両手で包み込む。

口をつければ、外気に冷えた体に、染み入り、その冷たさを癒していった。

インスタントコーヒー特有の、安っぽさと、さっぱりとした口当たりが、少し寂れた駅舎にあっていて、妙に納得してしまった。

駅を守り、毎日、淡々と、人を運ぶ彼らが、一日の終わりに、このインスタントコーヒーを口にして、ほっと息をつく。

きっと、それは、ずっと、続いてきた光景なのだろう、と。

あたしが、消えた後も、ずっと……

「温まりました？」

「……ええ……」

正面に座る彼は、上着を脱ぎ、上着と同じようにくたびれたシャツ、一枚の姿だった。駅員さんの目印のような上着を取り去れば、彼はもう、どこにでもいる、青年になっていた。

この状況に違和感を感じたまま、ぎこちなく返事を返すあたしを見て、彼は、困ったような笑みを浮かべた。

「すみません。なんか、無理やり連れてきてしまった形になっちゃいましたね……。少し、気になったので……」

その様子につられて、こちらも困ったような笑みを浮かべてしまう。なぜ、こんなときに、こんな場所で、見知らぬ駅員さんと、コーヒーを飲んでいるのか。

考えるほどに、この状況の可笑しさが見え、苦笑が浮かんでしまった。

「……電車」

「え」

「電車、乗らなかったでしょう？」

唐突に、彼が口を開いた。

見ていたのか。

彼は、見ていたのだ。あたしが電車に、乗らなかった、ところを。

「ああ……怒らないで下さい……」

眉間に力がこもるのが、自分でも分かったが、それを止めることはできなかった。

彼の指が、また、頬を掻いた。まいったな、というように。

「……すみません。ただ……少し、気にかかっただけで……話したくなければいいんです……いえ、すみません。忘れてください……」

いかにも、気まずい、という様子で、瞳を揺らめかせる彼の様子に、視線を奪われてしまう。

人の心を理解しようと歩みより、そして、それを拒絶されることを恐れる……そんな、人らしさ、みせる彼の様子が、心をじんわりと、温めた。

「……もしかして、自殺する、とか思いました？」

「えっ!!」

凶星なのか。

初対面なのに、これほど感情を曝け出せる人がいることに、くすり、

と思わず笑みが零れた。

きっと自分は、とてつもなく、深刻な面持ちで、ホーム脇に立っていたに違いない。きっと、その姿から、死を想起させるほど。その自覚は、あった。

だって、自殺ではないけれど、あたしは、消えゆく存在だったから。

「自殺、じゃ、ないですよ」

「ほ、ほんとうに！……あ……すみません……」

途端に、雲間に日が射すように、彼の表情が輝いた、が、すぐに、それも消え、また、気まずさを含む複雑な表情が浮かんだ。

「……本当に、すみません……。同僚から、はやとちりだって、よく笑われるんだけど……。笑えないですよね」

「……そう、ですね……」

彼の言葉への、肯定ではなかったが、誤解をしてしまったのか、力なく肩を下げてしまった。

初対面の、彼。きっと、もう二度と会うことはない。だから、話せるかもしれない……

「……あたし、たぶん、明日消えるんです」

「は……」

「信じてくれなくてもいいですから。ただ、今日あなたに会って、これきり、会わないと思うんです。それって、チャンスかな、と思って……。お願いです、覚えていてください、あたしが、居たってこと。一人の人格として、存在していたってこと」

彼は、ぽかんと、半開きに口を開けたまま、固まっていた。
信じてもらえるわけがない、と思いながらも、もしかして……という期待があった。

人格だけの、あたしに、生まれ変わりなんて、ない……と思っていた。

でも、信じてみたい……そう、思えた。

温かな、彼の人格が、そう思わせてくれた。

「ありがとうございます。コーヒー……温かさ、もらえました。

……最後に、あなたみたいな人に会えて、よかった……」

ことり、とテーブルにマグカップを置き、ソファから腰を上げた。

がたんっ

背後で、大きな音がした。

「……あの!!名前っ……教えてください」

その声に、振り返って、にこり、と、あたしに出来る限り、最上の笑顔を、浮かべた。

「叶（かなえ）」

プルルルルル……

『間もなく、ホームに電車が到着いたします。白線の内側まで――』

印象的な黒髪が、風に揺れた。

自然に視線が、引き寄せられて、彼女を目で追っていた。

自分が声を掛けたと気付いたのは、彼女のはっきりとした二重の瞳に、捕らえられた時だった。

もう、二度と会えない――と、彼女は、言った。

「木下……望（のぞみ）さん……？」

「はい」

「……望（のぞみ）？」

「はい、そうですけど……何か？」

目の前に立つ女性を、穴が開くほど、見つめてしまう。あまりにも不躰な態度だ、と分かっているにも止められなかった。

「……こ、こちらが拾得物として、お預かりしていた定期券です……」

拾得物の受け渡しの手続きにやってきた、一人の女性。
なんのことはない、日常業務の一環だった。

こっそりと、彼女のサインを盗み見る。

けれど、やっぱりそこにあるのは、癖のない、几帳面な楷書で書かれた『木下 望』の文字だった。

いつもよりも、ゆっくりと、手続きをし、丁寧に、定期券を手渡した。

「ありがとうございました」

ぺこり、とお辞儀をする彼女の姿を、どこか夢見がちに見つめていた。

ああ……これで、終わりだ。

「あ、あのっ！」

「……はい？」

気が付けば、また、声を掛けていた。

さらりと、振り返りざまに、風に揺らぐ黒髪。

深い、二重の瞼に、印象的な大きな瞳。

ただ、そこに映っていたはずの、寂寥の色が、今は消えていた。

「……叶さん、は……」

彼女は、刹那、こぼれんばかりに、瞳を見開いた。

「彼女は……」

そして、短い沈黙の後、小さい掌を重ね、その胸にあてた。

「……ここに」

白く、しなやかな指先は、確かに、あの日、あの部屋で、大きなマ
グカップを大切そうに抱えていた、彼女のもと、同じ指先だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296i/>

Bitter Memories

2010年10月20日15時39分発行